

保護司の活動の継続的動機についての一考察
「辞めたい」と思う辛い体験の語りから

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域
湯浅 健介

本研究は、更生保護に関わる保護司の体験を取り上げ、保護司の活動の動機の維持について考察することを目的とした。公共機関への民間篤志家である保護司は、保護観察制度において重要な活動をしている。しかし、これまでの保護司の対象者との関わりについての研究は多人数を対象とした質問紙調査が多く、実際の関わりについての個別的研究は見られなかった。そこで、保護司に直接インタビューをし、その活動の詳細に焦点を当て、保護司の心理的援助の体験を明らかにしていきたいと考えた。また特に、活動における辛い体験に注目することで、保護司を続けていく動機の維持について明らかにしようとした。

調査方法としては、現職の保護司（10名）を対象とし、個別のインタビューを重ねながら、中心テーマや質問項目を固めていった。最初のインタビューによって、あらかじめの質問設定を修正し、さらに興味深いポイントを整理したうえで、以降のインタビューに臨んだ。二人目のインタビューからは、「活動を経験する中で、再犯のように、印象深い出来事について」というテーマで聞き取り、五人目～八人目に対しては、「活動の中での、対象者の再犯や事故について。それに対して、どの感じ、どう対応したか」をテーマとして聞き取った。九人目のインタビューに進む前に、改めて中心テーマを「活動を続ける中での、心を痛める出来事について。それに対して、どう対応し、保護司を続けてきたか。どう意識を切り替えてきたか」と明確にし、さらに質問項目に「保護司を辞めようと思ったことはあるか」を設定した。その後、九人目、十人目のインタビューを行い、また「心を痛める出来事との遭遇」という新たなテーマ設定を行う前の保護司（二人目、三人目）にも、改めてインタビューを行った。

聞き取りデータの整理・分析により、保護司の活動上の失敗体験の捉え方における傾向の違いと、「もう辞めたい」と保護司が語る体験について、考察を深めた。その中で、対象者との関係における失敗体験の捉え方として、対象者との関係に過剰に期待を抱く傾向、対象者と適切に関係を持つ傾向、指導的立場で関わる傾向の三つの傾向があると推測された。

また、経験した保護司が「辞めたい」と語る体験には、活動上の対象者との関係を原因とするものと、保護司会内の人間関係を原因とするものが見られ、後者については、篤志家性の側面と近年新しい概念で推進されてきたボランティア性の側面の、保護司の二面性が大きく影響しているといえた。保護司を名誉職と捉え対象者に指導的に関わる保護司が身近で活動している場合に、対象者との関わりに重点を置く保護司が、「もう辞めたい」と感じていた。対象者との関わりにおいてはグループで行動する事はほとんど無いが、保護司という自らのアイデンティティを支える所属集団に、やはり大きな影響を受けるものであることが明らかになった。